
淡い記憶

藤崎禅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

淡い記憶

【Nコード】

N8830B

【作者名】

藤崎禅

【あらすじ】

学生時代るとき、早朝に部活の練習があつたとき7時3分発の電車に乗り込んでいた。そのときに向かいのホームに居た、名前も知らない少年。あの頃の淡い気持ちを。現在娘が共有する。7時3分。一日の気分を決める、大切な時間。

名前も知らない、彼。

早朝の反対方向の電車に乗り込む彼を見るために、私は急いで電車を降りて、息を切らせながら階段を駆け上がる。

ぼつりぼつりと集まった人たちの前を通り、いつもの場所で足を止めた。

心臓が激しく騒ぎ立てるのは、急ぎ走ったからなのか、それとも彼を目端で見つけたからなのかわからなかった。

鼓動を全身で感じながら、同じ乗り継ぎ駅で待つ彼に、ひっそりと視線を向ける。

彼はいつものように、少し眠たげな視線を電車が来る方向に注いでいた。

まだ朝の気配が色濃く残った駅のホームを、静寂さを含んだ空気がゆるやかに流れる。

たまたま、部活動で早く学校に行かなければならなかったその時に、初めて向かいに立っている彼を見つけてから、必要も無いのに早朝から部室に通うようになった。

たった三分間。

それだけが、私の一日を決める。

私がホームに立ってから三分後に彼の姿は電車と共にホームから消え失せてしまう。

電車が彼を連れ去ってしまうまで、私という存在に気づいて欲しいと願う気持ちを含んだ視線を送りながらも、少しでも彼が動く気恥ずかしさが心の中で爆発して、視線が合わないように外してしまふ。

見つめ続けることができたなら、その日は一日中、心が軽く、逆に電車の乗り継ぎ時間がずれてしまって逢えなかったら、灰色の空のようにどんよりと沈んだ気持ちになってしまい、集中力が欠けて

しまつ。

それほど私に影響を与える存在になつていくことを、彼は知らない。

物思いに耽つていけると、強い風が吹き込み、思わず眼をつむつた。眼にゴミが入らなかつたことを瞬きで確認してから、一瞬でも彼から視線を外したことに惜しみを感じながら顔を上げると、彼と視線が絡んだ。

真正面から向かい合い、心臓が一瞬驚いて鼓動を強めた。

顔が紅潮する前に、意地悪な電車が私を押し返すような風を纏つて視界を覆い尽くした。

初めて眼が合った瞬間は、今でも忘れられない。思い出すたびに、胸の奥がうずく感覚は、あの頃の幸せな一日の始まりを思い出させてくれる。

視線を上げると、食器棚のガラスに自然と口元に微笑みを浮かべているのが目に映つた。

少女の面影は消えて、すっかり『母親』の顔になつていくことに思わず苦笑する。

あれからぶつりと会う事がなくなつてしまつたけれども、今でも早朝に家を飛び出したときの清々しい空気や、まだ生活の音さえも聞こえない家並み、清涼感を含んだ風の中、名前も知らない彼をこの眼に映すためだけに走つて息を切らせた事は忘れられない。

ずっと胸の中で時を止めた淡く優しい記憶は、幾度恋愛しても消えることも無く、ただ小さく残つていた。

時折何かの拍子に思い出しては、自分の中に確かに存在していた『少女』の気持ち懐かしく感じる。

ふと、階段を駆け下りてくる足音が静まり返つた家の中で響く。

足音と一緒に、少女の声が遠慮がちに掛けられた。

焦る声、いつもよりも数分だけ遅れてしまつたが、経験上この数

分が一日の気分を決定的なものにする。

間に合わないとは分かっているのに、それでも、もしかしたらという望みを捨てきれずに支度する娘の背中を見ながら、かつての自分の姿を重ねて微笑を浮かべた。

電車の中で食べられるように用意しておいたおにぎりを手渡し、心の中で声援を送りながら駆け出す娘の後姿を見送った。

電車に揺られ、乗り継ぎ駅が近づくにつれて高鳴る鼓動を制服の上から掌で押さえながら、流れる景色を見つめていたあの頃の自分の姿を思い出す。

時計を見上げれば、思い出の午前七時を告げていた。

静かに食卓の椅子に腰掛けて、次に起きて来る人物を思いながら目を閉ざす。

七時三分までが、その日一日の気分を決定する大切な時間。

f i n .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8830b/>

淡い記憶

2011年1月20日00時07分発行